

---

# モンスターハンター ~ 狩人達 ~

スティーヴ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター ～狩人達～

### 【Nコード】

N0419I

### 【作者名】

ステイヴ

### 【あらすじ】

オレンの村に住む青年「ディーゴ・ウィンチエスター」彼は自身自身の成長とある目的を果たすため凶暴なモンスターを狩ることを生業としたハンターの世界に旅に出る。仲間との出会い、裏切り、別れ、そして思わぬ敵との遭遇を経て彼は「目的」を果たすことができるのか！？

## プロローグ「旅立ち」

ここは国の外れにある小さな村「オレン」。南方にあるこの村は小さいながらも温暖な気候の中、海と山に囲まれ、村人は豊かに暮らしていた。そして今一人の青年が一人前のハンターになる為、修行の旅に出ようとしている。

「デーゴ！忘れ物はないね!？」

「ないって！さっきから何度も言ってるだろ!!」

彼の名前は「デーゴ・ウィンチェスター」。

クロオビシヨートの銀色のヘアスタイルで一人前のハンターに成るべく村を旅立とうとしている20歳の青年だ。そして彼に向かってリオレウスの咆哮のような声を出しているのが彼の母親「アマンダ・ウィンチェスター」である。

2

「携帯食料、砥石、応急薬、ハンカチ、鼻紙持ったんだね!？」

「余分なものが二つほどあるってーの!」

こんな母親であるが、彼女も昔は名の通ったハンターであった。現役時代はレイア装備に身を固め、大剣を振り回し数々のモンスターを倒してきたものだった。

「ほらほらさつさと着替えて！早くしないと日が暮れちゃうよ！」

「今は朝だって！着替えにそんなかかるかよ！」

彼女にせかされるがままにディーゴは「レザーライトシリーズ」に身を包んでいった。

最後に武器である大剣「ポーンブレイド」を装備し、準備は完了した。

「あらよく似合うじゃない！あつそれとこの閃光玉も持ってきなさい！何かあるかわからないからね」

「へいへい、ありがと……」

ポーンブレイドはモンスターの骨をベースに作られた大剣であり初心者には扱いやすいものとなっている。アマンダがディーゴに渡した閃光玉は投げると激しい閃光を発生しモンスターの視界を一時封じるアイテムだ。

ディーゴは閃光玉を五つほど貰い、それもバッグの中に入れた。

デイーゴが村の門の前に着くと、彼を見送るため村人が大勢門の前に集まり、門の前はごった返していた。

「みんな大袈裟なんだよ……」

デイーゴは溜息混じりにそう呟いた。

「ほらデイーゴ！皆さんに一言挨拶しなさい……」

母にそう言われ、渋々デイーゴは皆の前に立った。

「あ……え……と……じゃあ……みんな行ってくるよ……」

「なんだよそれが挨拶かよ……」

村人の一人がそう言い、ギャラリイの間で笑いが起こった。

笑いの中オレンの村の村長「モロゾフ」、通称「ジイジ」がデイー

ゴに近づいて来た。

「ディーゴ…立派なハンターになるんじゃないよ」

「えっ…あっ！ああ…ジィ…いやっ村長こそお元気で」

モロゾフに言われディーゴは言葉に詰まりながらも別れの挨拶をした。

他の村人にも短いながらも挨拶を終えたディーゴは旅に出るべく門の前に立ち、一呼吸し長い旅への第一歩を踏みしめた。

「ディーゴ・ウィンチエスターばんざーい！！」

アマンドの声を皮切りに村の人々が大声でディーゴの名前を叫び始めた。

「だから大袈裟なんだよみんな……」

しかし内心悪い気はしなかったなんて死んでも言えない。

今、ディーゴ・ウィンチエスターの旅が始まる。その先には何があ

るのかわからない。

しかし何が起ころうともディエゴは心の中にある「目的」を果たす  
までには故郷に帰れない。

その目標は父親「アラン・ウィンチエスター」を超えること。

そして行方不明となっている父親を捜し出すこと。



## 第一話 密林の大決闘

ディーゴがオレンの村を出発してから三日目、出発してしばらくは野原や高原が続き、途中故郷のオレンの村くらい小さな村がありそこへ寄り食料を購入した。そして次の村を目指そうとする彼の前に立ち塞がるものは清々しい高原でなく、鬱蒼とした密林であった。

「マジかよ……」

しかしこの密林を通り抜けることが一番の近道であった。迂回するルートもあるが密林を通り抜けるルートと比べるとかなり遠回りになる。素材集めのこともありディーゴは密林を進むことにした。

途中に寄った村で食料や水と共に購入したピッケルと虫あみを使い、武器や防具の生産に使用するための鉱石や昆虫などを採取していった。素材集めの最中に大型の昆虫「ランゴスタ」や大型の猪の様な牙獣種「ブルファンゴ」に邪魔されながらも鉄鉱石やマカライト鉱石など順調に素材を集めていった。

そろそろ密林の出口が近くなり、ディーゴは川沿いの近くを歩いて  
いた……。その時、ズシンズシンとわずかながら地面が揺れた気がし  
た。彼はとつさに岩陰に身を隠した。

そしてゆっくりと岩陰から顔を出し周囲の様子を覗いた。対岸に目  
をやるとそこには桃色の体をした巨大な何かがあった。

「（あれは……ババコンガ！）」

昔、母親から聞いたことのある別名「桃毛獣」と呼ばれるモンス  
ターであったが本物を見るのは初めてであった。周りには小型の「コ  
ンガ」が二頭いた。群れのボスである証にババコンガの頭部の毛は  
果物の汁で固め角のようになっていた。しかし、まだババコンガや  
コンガ達はこちらに気づいてはいないようだが、逃げようと迂闊に  
飛び出しては見つかってしまい、戦闘は避けられない。だがデー  
ゴの装備はレーザーライトの防具に武器がポーンブレイド。今の彼に  
はとても勝ち目がない。ここは彼らが立ち去るまでここに隠れてい  
ようとディーゴは思った。

しかし、ギヤアギヤアと言ったたましい声と共にババコンガの周りに数等の青い体をした鳥竜種「ランポス」が現れた。さらにリーダーの大型のランポス「ドスランポス」も現れ、ババコンガ達を威嚇し始めると周りのランポスも揃って威嚇のためギヤアギヤアと騒ぎ始めた。ババコンガやコンガ達も威嚇のため仁王立ちになり雄叫びをあげた。

ここにはモンスター同士の戦闘に巻き込まれると思ったデイーゴは出口とは反対方向にある滝に向かった。移動を始めるとババコンガとドスランポスの戦いも始まったようだった。

しかしデイーゴは戦いには目もくれず滝の方へと走り出した。

何とか滝の頂上部へと辿り着いたデイーゴはババコンガ達の戦いを滝の上から見た。

どうやら体格で上回るババコンガとコンガ達が優勢のようだった。ドスランポスの群れは数等いたランポス達は倒れこんでおり残りはドスランポスと一頭のランポスだけになってしまったようだ。

ドスランポスはババコンガ目掛けて飛び掛ろうと地面を蹴り高く飛んだ。そしてババコンガの首に噛み付いた。痛みでババコンガは悲鳴を上げるとドスランポスを無理矢理引き剥がし太い腕でドスランポスの体に一撃を与えるとドスランポスは吹き飛び、ごつごつした岩肌に叩きつけられそのまま動かなくなった。そしてトドメと言わんばかりにババコンガは飛び上がるとその巨体で倒れているドスランポス目掛けてポディプレスをお見舞いした。残り一頭のランポスも逃げ去り、この勝負はババコンガ達に軍配があがった。

## 第二話 VS ババコンガ

モンスター同士の戦闘を目の当たりにしたディーゴはある種の恐怖を覚えた。この世界ではこのような戦いがいつも繰り広げられているのかと思うと体中に戦慄が走った。

その時、一瞬の油断からか足を滑らせ崖から落ちそうになるもの何とか足場となる突き出た岩に足を置いたところ脆くも岩は崩れ落ち、石片がババコンガ達の周りにバラバラと落ちた。

途端にババコンガ達はディーゴの存在に気づき彼に向かって威嚇し始めた。

「ヤベっ…さっさと逃げた方がいいな」

ディーゴは滝の上流の方へと走り出した。こう言う場合レザーライトの装備の軽さが役に立ち、逃げることに對して何の支障もなかった。

しばらく走ると先ほどいた場所よりもさらに険しい岩場が続くようになり、レザライットの防具が軽量であっても普通に歩くことに苦勞を強いられた。

「（ここまで来ればもう安全だな…）」

デイーゴは大きな岩の陰に身を隠し、地図を見ながら密林を抜け出すルートを探し始めた。川沿いを下るルートは危険と考え、少々危険だが崖を越えた先にある海辺まで移動しようという結論に至った。

しかしそう簡単にはいかなかった。デイーゴが岩陰から飛び出すと同時に空中から桃色の巨体が先ほどまでいた岩場に激突した。デイーゴが休息している間にババコンガ達はすぐそばまで来ていたのだ。

「グオオオオオオオオオ！！」

ババコンガは再度立ち上がり雄叫びを上げ、それと同時に放屁をしたのか辺りには鼻が曲がるかと思うほどの悪臭が立ち込めた。

「畜生！こうなったら…やるっきゃねえ！！」

デイーゴもボーンブレイドを構え臨戦態勢に入った。勝ち目はない戦いだと心の中で思いつつも、ここで逃げ出したら単なる腰抜けになってしまう……これは彼の父親の名誉を守る戦いでもあるのだ。

まずデイーゴは突進してくるババコンガや二頭のコンガを避けつつ、足場の悪い岩場から抜け出した。そして森の中を突き進み、少し開けた場所に出た。そしてデイーゴを追い、ババコンガ達もこの場所に辿り着いた。

デイーゴはまず母親から貰った閃光玉を取り出しそれをババコンガ目掛けて投げた。途端に激しい閃光が視界を支配した。デイーゴは腕で視界を守ったが、まともにその閃光を見たババコンガ達は視界を奪われ混乱状態に陥った。

デイーゴは冷静にまず二頭のコンガから仕留めていった。威力の弱いボーンブレイドでも混乱状態のコンガ二頭を狩る分には充分だった。

しかし問題はババコンガであった。混乱状態に陥っていてもまだ暴れ周り、まともに相手が出来る状態ではなかった。ババコンガを斬りつけようとボーンブレイドを振り下ろすが予想以上に硬い皮膚の前ではあまりダメージを与えることが出来なかった。

そうするうちにババコンガの混乱は解け、デイーゴはその強靱な腕の一撃をまともに受け、吹き飛んだ。

「ぐはあっ…っうっ……」

デイーゴは全身を強く岩に打ちつけたが、防具があったおかげでまだ動ける状態ではあったが、レーザーライトの防具はいたるところが凹み、もう防具としての役割はあまりないように思えた。



そしてまたババコンガはディーゴ目掛けて突進をしてきた。彼は咄嗟に閃光玉を取り出そうとバッグの中に手を入れようとするが、先ほど吹き飛ばされたときにバッグは体から離れどこかに落としてしまったようだ。

「（……）（……）（……）（……）（……）（……）」

死を覚悟したディーゴの前に現れたのはレウスの防具に身を固め、武器の太刀「飛竜刀（椿）」を手にした一人の人間だった。

「えっ……!？」

ディーゴが呆気にとられている間にそいつは驚くほどの速さで太刀を振りかざし、あっという間にババコンガを仕留めてしまった。

「グガガガ…ガアア……」

ババコンガはその場に倒れこみピクリとも動かなくなった。

その人間は太刀を背中中の鞘に仕舞い込み、こちらに近づいて来た。

そしてディーゴから三步ほど離れた場所で立ち止まり、そいつは頭の防具を外し素顔を見せた。ディーゴの目に最初に入ったのは燃えるような赤色のレウスレイヤーの髪であり、年齢もディーゴとさほど変わらないように見えた。

### 第三話 出会い…そして拘束!?

「ここで何をしている!？」

「えっ…!?あ…いや……」

答えに戸惑っているとき、それはディーゴの首元に太刀の鋭い刃先を突きつけた。

「おわっ!?!ちよっ…ちよっと待て!」

「何をしているかと聞いているんだ…」

このまま殺されてしまうのではないかと言う恐怖と焦りがどつと押し寄せ、ディーゴは思わず後ずさりした。それを追うように赤髪も間合いを詰めて来た。眼から発す鋭い眼光は彼に殺気さえ覚えさせた。

「おっ…俺は別に何も…ただこの森を抜けようとしているだけだ」

「コンガを二頭狩ったのは!？」

「あれは襲われそうになって仕方なく…」

「ならこのバッグに入っている鉄鉱石やマカライト鉱石はどう説明する!?!？」

赤髪が手にしているバッグは間違いなくディーゴのバッグだった。その証拠にこの森で取った鉄鉱石やマカライト鉱石などが顔を覗かせている。

「それは…街に行つて武器と防具を作るために採つたんだぜ!？」

「……認めたな…ハンターズギルド直属治安維持部隊の権限においてお前を拘束する」

一瞬言われた意味が解らなかつた。何故俺が!?俺が一体何をしたつて言うんだ!!頭の中で様々な疑問が交差するなかつたの間にか周りに数人の防具を着た人間が立っており、ディーゴの両手は彼らに後ろ手にされ手錠が掛けられていた。

「おいっ!?!ちよつと待てよ!俺が何をしたつてんだ!?!」

ディーゴはわけが解らず赤髪に問い詰めようと近づこうとするが、周りの人間達に制止させられてしまう。それを振り切ろうと拘束されてない足を使いなりふり構わず蹴りを一人に浴びせた。

「おとなしくしろ!?!」

数人掛かりで押さえよつとするもディエゴはそれでも抵抗をし続けた。

ドガッ

「ぐふう…」

痺れを切らした赤髪がディエゴのレーザーライト防具の腹部のガードが弱い部分に拳を一発叩き込んだ。ディエゴはその場でうずくまり動かなくなった。

「連行しろ」

「了解！」

デイーゴは赤髪の下下らしき人間に両肩を抱えられ、無理矢理立たされた。

### 「ドンドルマの街」

ここは国の首都「ドンドルマ」。人間、亜人間、竜人、獣人など多様な人種が暮らしており、ハンターズギルドの中枢があるのもこの街だ。中央広場にはハンターに必要な武器や防具が揃う「武器・防具屋」、そして普通に生活するにあたって必要な物が取り揃う「雑貨屋」など様々な店が軒を連ねている。

デイーゴは無法者が蔓延る収容所に入れられた。

「おいつ！俺が何をしたってんだ！！出しやがれ！この赤髪野郎！

「！」

デイーゴは必死で牢屋の鉄格子を掴み蹴ったり揺すったりもするがそんなことで扉が開くわけがなかった。

「お前の罪状は不法採掘及び公務執行妨害だ」

赤髪はそう述べるが、デイーゴ食い下がらなかった。

「ああっ！？不法採掘だあ！？？へっ鉱石取るにもおたくらの許可が必要だったのかっ！？」

「そうだ…お前のようにクエストを受注せずに鉱石や昆虫の採取を行った者はそれはすべて不法行為にあたりこの収容所に入れられる」

「おいおいおい！んなこと言われたって俺は知らなかったんだぜ！？」

「知らなかったで済む訳がないだろう…！？」

冷たく言い放つ赤髪に対してデイーゴの怒りはさらに激しくなった。

「ふざけんなっ！！てめえ！出しゃがれってんだ！！その頭丸刈りにすんぞ！！」

「……本来、不法採掘を犯したものは罰則金の支払いで釈放なのだが、お前は我々に歯向かい暴力行為をするにまで至った。ここで……少なくとも一ヶ月間は拘留することになるだろう」

一ヶ月……こんな所で一ヶ月間も過ごさなければならぬなんて……  
ディーゴの怒りはだんだんと冷め、情けないという気持ちが込み上げてきた。

「ようやく収まったか……そこでしばらく大人しくしてろ」

自分の前から去っていく赤髪に対してディーゴは鉄格子に顔を押し付け叫んだ。

「ちょっと待ってくれ！俺にはやらなきゃならぬことがあんだ！  
！こんな所にいる訳にはいかねんだよ！なあ……頼むっ！ここから出してくれ！！頼む！！」

ディーゴの必死の願いも虚しく赤髪はその場から静かに去っていった。完全に赤髪が見えなくなるとディーゴはその場で崩れるように倒れ込んだ。



「父さん…じめん……」

## 「大衆酒場」

ここは多くの人で賑わう街一番の酒場だ。だが店の客の多くはハンターであり、様々な情報が飛び交うここはまさにハンターにとって絶好の情報源でもある。さらにここではクエストの受注も可能であり、一緒にクエスト参加を募集する張り紙がカウンター横にあるクエストボードに所狭しと張られている。そこはこの店でも1番人が集まる所でもあり、異様な熱気に包まれている様な感じもする。

クエストボードから一番離れたカウンター席に彼は座りグラスに注がれた酒を飲んでいた。

「ねえカルロス…何か食べないの？いつもお酒ばかりだけど！」

「アリス……デリンジャーって呼べていつも言ってるだろ」

「はいはいわかったわよ…カルロス・デリンジャーさん!？」

「別に本名で呼ぶ必要は無い…」

カウンターの受付嬢と話しているのはデイーゴを収容所に入れた張本人「カルロス・デリンジャー」だ。彼もハンターであり、不法ハンターを取り締まる「治安維持部隊」の隊長の座を担っている。

「そういえば今日、また不法ハンターを取り締まったんですって!？」

カウンター嬢のアリスがカルロスに話し掛ける。

「ああ…無駄に威勢のいい奴だ」

「最近多いわね…そういうの」

アリスの言う通りここ最近不法に狩りをする者が増え治安維持部隊は連日出動している。中には武器で抵抗し、治安維持部隊に歯向かうハンターもあり、部隊の隊員にも怪我人が増え続けている。

「そつえばあいつ…」

「んっ！？どうかした？」

「いや…なんでもない」

カルロスはデイーゴから立ち去る時に彼が何か叫んでいるのを思い出し、アリスから問い詰められそうになりすぐに誤魔化した。

「調べてみるか…」

先ほどデイーゴの名前を聞いた時に「ウィンチエスター」に対して何か引つかかる部分があり、カルロスはその場を立ち上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0419i/>

---

モンスターハンター ~ 狩人達 ~

2010年10月10日18時24分発行